

## 『書き込んで理解する動物の寄生虫病学実習ノート』

著：浅川 満彦（編）、筏井 宏実、佐々木 均、平 健介、常盤 俊大、林 慶、柳田 哲矢  
（文永堂出版、2020 年）

浅川 満彦

酪農学園大学 獣医学群 獣医学類 感染・病理学分野 医動物学ユニット



5 年程前から、文永堂出版から本書刊行を打診されていた。理由は、同社刊『獣医寄生虫検査マニュアル』（以下、『マニュアル』）を、浅川が担当する実習で、教科書として指定し、永年、使っていたからだ。『マニュアル』は情報量が豊富で、完璧な手順書である点で名著であるし、学生には一生使えるとして購入を推奨していた。それでも、実際に実習で扱うのは『マニュアル』の全てではない。そこで、実際の学生実習で優先される内容を絞り込み、かつ、学生が購入し易いように廉価なものが企画された。この点で、『マニュアル』のニッチとは明確に異なる。が、それはともかく、当然、獣医学教育モデル・コア・カリキュラムの寄生虫病学実習項目を網羅しなければならないし、国家資格化された動物看護師向けにも対応させる。これら条件を全て満たしたのが本書である。本書は6つの章、すなわち、原虫類、吸虫類、条虫類、線虫類および外部寄生虫の形態観察と寄生虫病の検査で構成され、付録として吸虫の中間宿主となる巻貝の同定法と海産魚の検査が補足された。

本書題名末尾をノートと題したのは、まさに、本書の特徴となるが、ワーク・ブック形式を採ったことである。具体的には、重

要な寄生虫の虫体や虫卵、組織病変などの画像が薄く印刷され、それを学生らが自身で好きな色のペンで擦（なぞ）ったり、講義で得た情報を加筆するなどをして、自己学習をする仕掛けとなっている。もちろん、この仕掛けは、規定授業時間内では教授し難い、あるいは、学生それぞれの作業進行度に差があることを前提にしており、それを補完するため、そして、自己学習を促進するために編まれたものだった。

しかし、奇しくも、本書刊行後、突如襲った Covid-19 体制の中、予想以上の教育的な効果を発揮したことが判った。Covid-19 による大学教育運営も変更を余儀なくされ、通常の大教室で行う講義が遠隔式になったのは当然、実習も対面と遠隔が混在となった（基礎獣医学系では、すべての実習が遠隔となったものも少なくない）。寄生虫病実習でも、説明は遠隔で行い、対面は極めて短時間の標本観察とした。その際、事前にこの教科書の書き込みさせ、出欠確認はその作業を確認して行ったが、その形跡から、多くの学生が楽しく、本書に向き合ってくれたことが推し測られた。Covid-19 の自粛生活というやや偶然的な要因が働くが、本書が採ったワーク・ブック形式は正解であったと自賛している。

しかし、これで満足してはいけない。本書を叩き台に改定を続け、より使い易く、学生の理解の助けになるものとして改定を続けて欲しい。幸い、本書主要部となる原虫と蠕虫を執筆されたのは、いずれも本学会の若手・中堅の気鋭であるので、この点は安泰である。期待をして頂きたい。